

vol.

15

Mar.2023

市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI



大正12年(1923)に陸軍飛行第五大隊が発行した絵葉書(立川市歴史民俗資料館蔵)

大正11年(1922)に立川に飛行場が開設されてから、2022年で100年が経過しました。表紙の画像は、飛行場が開設された翌年の1923年に発行された絵葉書です。俯瞰した飛行機のイラストと飛行場周辺の地図、空中写真が組み合わさった、凝ったデザインとなっています。

今号では「写真でふりかえる飛行場と立川の100年」と題し、飛行場開設から現在まで、飛行場と共に変化してきた立川のすがたを、写真で振り返ります。

また、市史編さん室のスタッフと市民の皆さんが一緒になって古文書を解読する「立川の史料を読む会」について、平成30年度以降の活動報告とその成果を、実際の史料を例に挙げながら、具体的に紹介します。

巻末では令和4年度刊行の『資料編 先史』と『調査報告書 古代・中世編 1 古代中世の考古・石造物・美術工芸』について、概要と見どころを紹介します。

目次	・第6回関連講演会のご報告..... 2	・令和4年10月～令和5年3月活動報告..... 11
	・部会短信..... 3	・受贈図書・資料提供者..... 11
	・写真でふりかえる飛行場と立川の100年..... 4～7	・刊行物紹介..... 12
連載		
	・立川おっこぼれ話「もろびとこぞりて～立川基地のクリスマスパーティー～」..... 2	
	・「立川の史料を読む会」活動報告..... 8～10	



第6回関連講演会のご報告

令和4年12月11日（日）、対面形式としては3年ぶりとなる第6回市史編さん関連講演会を開催しました。「考古学と自然科学で読み解く先史時代の立川」を共通テーマとし、令和3年度に先史部会が刊行した2冊の調査報告書『大和田遺跡第1・3・4地点発掘調査資料 再整理報告書』『立川市域の古墳時代』にまとめた自然科学的分析の成果について講演しました。

基調講演 谷口 康浩氏（立川市史編さん先史部会 部会長／國學院大學文学部教授）

部会長の谷口氏からは、刊行された調査報告書を基点とした、考古学と自然科学的分析の共同研究の歴史とその成果について報告がありました。

第1部 山本 華氏（同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター／株式会社パレオ・ラボ）

「土器の種実圧痕からわかる縄文時代の植物利用」

山本氏からは、土器には作られた当時の種実が「くぼみ」＝圧痕として残されていることがあること、圧痕をシリコンで型取って観察することで当時利用されていた植物の種類が分かることなどの報告がありました。

第2部 青木 敬氏（立川市史編さん先史部会 副部会長／國學院大學文学部教授）

「立川市の古墳—考古学と物理探査から探る—」

副部会長の青木氏からは、これまで実態が不明であった立川市の古墳に対して行った地中レーダー探査の成果とその意義について報告がありました。

会場となった女性総合センター・アイム1階ホールには、立川市内外から60名の方が来場され、講演会は盛況のうちに終了しました。



谷口 康浩氏



山本 華氏



青木 敬氏

立川おっまぼれ話

もろびとこぞりて ～立川基地のクリスマスパーティー～

右の写真は、昭和28年（1953）にフィンカム基地（立川基地東地区の旧称）で開かれた子どもたちのためのクリスマスパーティーのプログラムで、市民の方から市史編さん室へ寄贈された文書の中から見つかりました。同じように見つかった、基地で働く日本人向けの新聞『空軍兵站新聞』でも、



▲「立川少年・少女クリスマス祝典」立川市蔵

このクリスマスパーティーについて報じられていました。その紙面によれば、基地が主催するクリスマスパーティーはこの年で第5回を数え、同年の夏に朝鮮戦争が休戦したこともあって盛大に催される予定であり、前年に続き2万人を超える子どもの参加が見込まれるとのこと。パーティーの開催は当時の市報でも紹介されており、年末恒例の大行事となっていたことがうかがわれます。

パーティーでは、軍楽隊有志による楽曲演奏をはじめ、東京都立立川高等学校生の聖歌団による讚美歌合唱、立川市立第三小学校や市内幼稚園の児童による舞踊、立川米人小学校（基地将兵の子女が通う学校）の児童による劇、プロの軽業師たちによるアクロバットショーといった多彩な出し物が披露されたようです。高校生聖歌団の合唱では、日本人の指導者とともに、基地でも歌自慢で評判だった兵士が指揮棒を振りました。また基地内でのチャリティー行事の収益で総量3.5トンにもおよぶキャンディーの山が用意され、パーティーのクライマックスで登場したサンタクロースから、来場した子どもたちに振る舞われました。（渡邊）



部会短信 (令和4 (2022) 年度後期)

先史部会

今年3月に、『資料編 先史』を刊行しました。平成28年度以来、先史部会が進めてきた調査の集大成であり、全9章・約640ページと大部に仕上がりました。ご協力いただいた皆さまに厚く御礼申し上げます。来年度からは、通史編に向けた追加調査を行う予定です。

また、12月11日には令和4年度市史編さん関連講演会として「考古学と自然科学で読み解く先史時代の立川」を女性総合センター・AIMで開催し、3人の講師が講演しました。対面形式としては3年ぶりの開催でしたが、多くの方々にご参加いただき、盛況のうちに終了しました。



市史編さん関連講演会の様子

古代・中世部会

かつて柴崎町にあった満願寺に関連して、小平市にある円成院にて木造薬師如来坐像・木造別峰和尚坐像・木造十二神将立像、立川市歴史民俗資料館にて個人蔵の聯を調査しました。円成院にある薬師如来坐像は平安時代の仏像でありながら、いままで詳しい調査はされていませんでしたが、今回の調査で詳細な構造がわかりました。

また、くにたち郷土文化館にて三田敬次家文書の城山絵図、日野市郷土資料館にて立川家石造物、市内では個人宅や立川市歴史民俗資料館にて石造物調査を行いました。調査成果は調査報告書『古代中世の考古・石造物・美術工芸』に詳しく掲載しています。



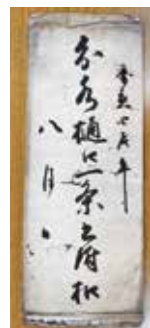
円成院 (小平市) での撮影風景

近世部会

『資料編 近世2』の刊行に向けて、砂川地域の古文書調査を重点的に進めています。

その中で、近年発掘されて注目が集まっている中藤新田 (国分寺市) 分水の胎内堀に関する史料が見つかりました。慶応4年 (1868) にトンネルを掘り分水を暗渠化するにあたり、分水の利用に関わる砂川新田や砂川前新田も工事費用の一部を拠出していたことがわかります。また工事の前年には、分水の利用をめぐる両村と中藤新田の対立もありました。農業を主体とする村にとって、水は他村と共同で利用する大切な資源でした。

引き続き史料の調査・解読を進め、近世の村の姿を明らかにしていきたいと思っています。

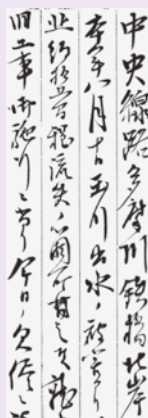


慶応4年「分水樋口一条書附扣」(小林秀和家文書16-9、立川市歴史民俗資料館蔵)

近代部会

『資料編 近代1』の刊行に向け、引き続き掲載する資料を選び、原稿化する作業を行っています。資料調査は国立国会図書館・東京都公文書館・市内旧家などで実施し、市史編さん室内でも借用・寄贈資料の整理・撮影等を行いました。

国会図書館での新聞調査は「東京日日新聞 (府下版)」を中心に行っていますが、長野県や山梨県の新聞にも立川関係の記事がありました。それは、明治43年 (1910) の水害で、長野県・山梨県と東京を結ぶ中央線も被害を受けたからです。この水害で、立川一日野駅間の多摩川橋梁が不通となり、仮橋を設けて徒歩連絡をしたことが書かれています。橋梁被害は立川町の公文書でも確認でき、記事を補完しています。



公文書に書かれた多摩川橋梁の被害 (部分) (立川市歴史民俗資料館蔵)

現代部会

現代部会では『資料編 現代2』の刊行に向けた調査を続けており、市の公文書の調査は平成年代まで進んでいます。この時期は現在の立川市へと繋がる最も近い時代の歩みで、まだ歴史として位置づけることは難しいですが、まちづくりや公共施設の整備が進み、日々変化する社会情勢とともに行政も変革を求められた重要な時期です。

また、立川市歴史民俗資料館で所蔵する文化財保護審議会の公文書の調査も進展しました。市史で利用している貴重な文書や民具等の資料が、急激に変化する立川の街並みのなかで、どのように残され、どう活用されてきたのかが、当時の市政や社会との関わりとともに浮かび上がってきます。



歴史民俗資料館の展示イメージ案 (「平成6年度文化財保護審議会会議録」、立川市歴史民俗資料館蔵)

民俗・地誌部会

『資料編 砂川の民俗』(令和5年度末に刊行予定)に向け、各種の聞き書き調査を実施しています。

10月には、よいと祭りや松中小学校において、松明作り・松明回しに関する調査を行いました。11月には砂川地区伝承民謡保存会にご協力いただき民謡やクルリ棒についてのお話をうかがいました。昨秋は、各地で開催された3年ぶりの祭礼を参与観察し、新型コロナウイルス感染症に対応した祭礼の様子なども記録できました。

また、かつて養蚕をされていたお宅のご協力を得て、蚕室の実測と聞き書きも実施しております。現存する蚕室や桑室関連の資料などありましたら、市史編さん室へ情報をお寄せください。



クルリ棒の解説

写真でふりかえる 飛行場と立川の100年



1922年（大正11）に農村地帯だった立川に飛行場が開設されてから、100年の時が流れました。この間に立川市は、多摩地域の中核をなす都市へと飛躍的に発展しました。今回の特集では次の100年に向けて、現在までの飛行場と立川市のあゆみを、市史編さん室がこれまで調査・収集した写真資料から振り返ります。

1 立川飛行場の建設

1921年、陸軍の航空第五大隊（のち、飛行第五大隊→同第五聯隊→同第五戦隊に改編）の敷地として立川のほかに川越（現埼玉県川越市）・小川（現小平市）・上溝（現神奈川県相模原市）が候補地となりました。その中で立川が選定され、翌1922年に立川飛行場が建設されました。工事には当時では珍しいトラクターも使われ、山林原野や桑畑は飛行場へと変貌しました。

※『たちかわ物語 vol.14』P.2「立川おっこぼれ話」を参照

整地作業中の立川飛行場(1922年)▶



2 飛行第五大隊の移駐



飛行場正門は立川駅から北へおよそ300メートル離れた場所にありました。当時は砂川・所沢へ向かう街道があるほかはほとんどが原野・畑で、夜はとても暗く、地元の人でも近づくのには勇気がいる場所だったといえます。



▲建設中の格納庫(1922年)

1922年11月10日、飛行第五大隊は立川に移駐し、立川駅で村長や青年団のほか、多くの人々の出迎えを受けました。立川飛行場と関連施設の開設は人口増加をもたらし、1923年12月に立川村は立川町になりました。

◀飛行第五大隊を出迎える立川村民(絵葉書)(1922年)

3 「空都」たちかわの隆盛



1923年に日本飛行学校が立川飛行場に練習所を開設しました。また、関東大震災の影響で、朝日新聞社航空部などが洲崎（現江東区）から立川飛行場に移転し、民間の利用も活発になりました。国際飛行場としても利用され、立川は「空都」として世界的に知られるようになりました。1930年には飛行場でにぎわう立川の繁栄を祝う「立川小唄」が発表されました。

1931年に羽田飛行場が完成して民間航空が移転すると、立川飛行場は軍の専用になりました。

◀民間航空が集中した飛行場西地区(絵葉書)(1931年)

4 飛行場周辺と立川排水路



終戦直後における立川飛行場
(1945年 航空写真に加筆)

立川飛行場の開設は、人口の増加や雇用の創出など、立川に大きな繁栄をもたらしました。ところが、陸軍と飛行場に主導された急速な発展に対しインフラの整備は追いつかず、さまざまな都市問題を抱えることにもなりました。その一つが排水問題です。大雨や長雨により、飛行場や周辺の敷地からあふれた雨水は東南の立川駅方面へ流れ下り、立川駅一帯はしばしば大きな浸水・冠水に見舞われました。

この水害の解決のため、飛行場の東南部から多摩川までの全長約4kmの排水路が開削されることになりました。第二次世界大戦中の1943年11月に測量が行われて翌年4月から工事が始まりました。写真の青色で示した箇所が排水路です。この立川排水路は終戦後の1947年4月に通水し、1949年8月に「緑川」と命名されました。その後、市民の要望もあって1960年から覆蓋（暗渠化）工事が行われ、現在は駐車場や駐輪場、公園、道路など様々に活用されています。



立川駅北口の冠水(1935年 立川市蔵)

※立川飛行場周辺の軍事施設・軍需工場については『たちかわ物語 vol.8』P.10「立川おこぼれ話」を参照

立川飛行場関連年表 (1921～1945) 太字は飛行場の画期となった出来事

年	出来事
1921 (大正10)	陸軍省が立川飛行場の開設を決定
1922	立川飛行場開設、飛行第五大隊移駐
1923	日本飛行学校が立川飛行場に練習所を開設 関東大震災がおこる
1929 (昭和4)	立川村、町制施行により立川町となる 朝日新聞東西定期航空会が洲崎から立川へ移転
1930	石川島飛行機製作所が立川に本拠地を移転
1931	日本航空輸送が立川から羽田飛行場へ移転
1932	立川飛行場が陸軍の専用飛行場となる
1933	民間航空事業者が立川飛行場を立ち退く
1934	陸軍航空補給部支部が所沢から立川へ移転
1935	立川陸軍航空支廠設立
1936	石川島飛行機製作所が立川飛行機株式会社へ改称
1937	神風号が立川ーロンドン間を飛行 *都市間連絡飛行の世界最速記録を樹立
1939	飛行第五戦隊が立川から柏へ移転 陸軍航空技術学校が所沢から立川へ移転
1940	立川町、市制施行により立川市となる
1941	太平洋戦争開戦
1943	砂川村に高射砲部隊開設
1944	立川飛行場からの排水路開削工事開始
1945	立川駅北口一帯の建物疎開開始
1945	第二次世界大戦終戦 米軍機により立川市・砂川村が空襲をうける

戦後の飛行場

当初、東京の「空の玄関口」として民間にも利用された飛行場は、戦後に進駐した米軍によって、周辺の多くの軍需工場とともに接收され、立川基地として整備されました。

5 陸軍飛行場から米軍基地へ



立川駅のクリスマス装飾(1950年)

立川基地に米軍が進駐したことで、米軍機が盛んに行きかうようになった一方、周辺は米国文化の最前線にもなりました。駅を飾るサンタクロースと輸送機はそれを象徴しています。



諏訪通りの仮装行列(1955年)

立川基地メインゲート北側(1960年代 米空軍第374空輸航空団広報部提供)



6 外国人向けの店

Souvenir Store = 土産物店

基地に駐留する米軍将兵は、購買力の新たな担い手にもなりました。現在の西地下道南側出口付近から立川駅方向を写した上の写真では、右側に外国人向けの土産物店が写っています。こうした店舗が、立川駅の北口だけでなく、線路をまたいだ南口にも広がっていました。

7 基地を眼前に栄えるまち

写真は現在の曙町二丁目交差点にあたる地点から北西方向を写したものです。写真中央から左下に向かう並木が基地と市街地の境界線です。周辺には、当時の人気製品から、米兵向けと思われる英字のものまで、様々な看板が並んでいます。

立川飛行場関連年表 (1945~2022)

1945 (昭和20)	1947	1950	1954	1955	1956	1960	1961	1963	1968	1969	1972	1977	1979	1983	1989 (平成元)	1990	1994	1995	1998	2003	2005	2010	2022 (令和4)	
米軍が進駐し立川飛行場及び関連施設を接收	立川排水路が完成、49年「緑川」と命名	朝鮮戦争開戦(〜53年休戦)	砂川村、町制施行により砂川町となる	砂川で基地拡張反対運動(砂川闘争)おこる 立川基地を含む五米軍基地の拡張計画公表	国が立川基地拡張予定地測量の中止を発表	緑川の覆蓋(暗渠化)工事が始まる	米軍のベトナム戦争介入が本格化(〜73年)	立川市と砂川町が合併	米軍が立川基地拡張計画の中止を決定	米軍が立川基地での飛行業務を停止	立川基地の一部敷地が返還される	立川基地全面返還	国が立川基地跡地利用計画大綱を決定	基地跡地に陸上自衛隊立川駐屯地が完成	基地跡地に国営昭和記念公園が一部開園	立川駅北口周辺の都市計画事業が決定	基地メインゲート跡に「憩いの場」が完成	基地跡地に「ファール立川」がまちびらき	広域防災基地の全施設が基地跡地に完成	多摩モノレール部分開業(00年現区間開業)	国の基地跡地の処理方針が「原則活用」に	国営昭和記念公園「みどりの文化ゾーン」開園	立川市役所が基地跡地へ移転	基地跡地で「たちむにい」が試験操業開始

8 鉄道から緑道へ

現在の栄緑地は、1972年の基地一部返還に伴って廃止された引き込み線の跡地です。鉄道を利用して物資を運ぶために中央線から飛行場東側まで敷かれ、戦前は飛行機工場に、戦後は米軍に使用されました。



廃止された引き込み線(1976年)



返還後の基地内(1980年頃)

9 役目を終えた基地施設

写真は日本側へ返還された後の基地内の様子です。給水塔は7の写真中央にあるのと同じものです。立川基地の施設は、民間へ返還された敷地の一部施設を除き、ほとんどが跡地開発の中で解体されました。

10 基地のゲートが市街地のゲートに

旧立川飛行場正門・立川基地メインゲートだった区画には、市制50周年事業の一環で広場「憩いの場」が整備され、アートと一体となった業務地区「ファーレ立川」の玄関口のようになっています。



完成した広場「憩いの場」(1990年)



現在の憩いの場
曙町二丁目交差点北東側から
(2023年 立川市蔵)



ファーレ立川に配置された
アート (2023年 立川市蔵)



空から見た立川駅北口方面(2015年 立川市蔵)



サンサンロードを走る多摩モノレール(2023年 立川市蔵)

11 基地跡地とまちづくり

基地の返還後は、その跡地開発を中心にしたまちづくりが進められました。東側地区では、新たな交通の軸となる多摩モノレールの軌道や車両基地の建設に基地跡地が活用され、その周囲に公共機関や商業施設などの新たな街区が造られました。西側地区でも「クリーンセンターたちむにい」などが整備されています。

基地跡地にある公共機関の例

- ・立川市役所
- ・国営昭和記念公園
- ・広域防災基地
- ・自治大学校
- ・国立国語研究所
- ・国文学研究資料館
- ・統計数理研究所
- ・国立極地研究所
- ・東京地裁支部



立川市役所(2010年 立川市蔵)

むすびにかえて

今回は飛行場とそれを取り巻く街並みに移り変わってきたそのときどきのすがたを、写真で振り返りました。これからの立川市は、どのような街になっていくのでしょうか。その行く末を探る一助となるべく、引き続き、市史の編さんを進めていきます。

[注] 本特集に使用した写真は、特に記したものを除き立川市歴史民俗資料館蔵。

「立川の史料を読む会」活動報告

はじめに

「立川の史料を読む会」は、市史編さん事業と市民の方々との協働の場として平成28年（2016）度に発足しました。立川市では以前から、「公私日記研究会」など市民の方々が中心となって古文書の整理や目録・史料集の刊行を担ってきた歴史があります。地域に残された史料はそこに住む人々の共通財産ですので、専門家だけでなく市民の方々が主体的に史料に関わることも大切なことです。また大勢で協力し、意見を交わしながら史料を読むことで、解説の正確性や内容への理解がより一層深まるという利点もあります。「立川の史料を読む会」は、市史編さん室のスタッフと市民の方々が丸となって同じ史料を読み、その成果を編さん事業に反映できる場を目指して活動しています。

平成29年度からは毎月第3金曜日を開催日に定め、参加者同士で議論しながら史料の解説を続けてきました。『たちかわ物語』4号（平成29年9月発行）の「立川の史料を読む会」活動紹介では、会の発足から2年目（平成29年度）までの活動内容や成果、参加者の声を掲載しました。今回はその続報として、平成30年度以降の活動の内容をご紹介します。

各年度の活動

平成30年度以降も、引き続き柴崎村の鈴木家文書の中から史料を選んで解説を行っています（下表参照）。これらはいずれも平成20年に立川市歴史民俗資料館に寄贈され、編さん事業で整理を完了した史料です*1。

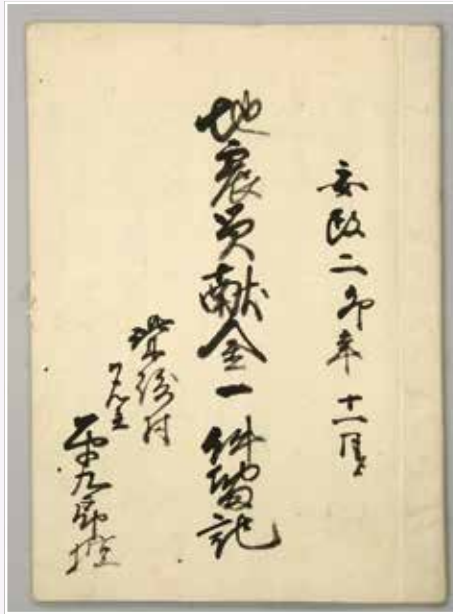
【平成30年度以降の解説史料】

年度	解説史料	史料の概要	備考
平成30年度	① 元禄6年「寄進申田地主形之事（両親の菩提寺にて五反田普濟寺領下田を寄進、褒美頂戴に付）」（鈴木家文書19-1-2）	普濟寺領の年貢や土地取引に関する証文	
	② 貞享5年「証文之事（普濟寺領出作の年貢高定納に取極に付）」（鈴木家文書19-1-3）		
	③ 寛文7年「覚（検地役人へ取成し寺領のうち川欠無田分に百姓開墾地を囲入れに付礼状）」（鈴木家文書19-1-4）		
	④ 享保3年「□□（証文）之事（寺領囲い地の年貢米を検見取に決定の件再度定免に取決めに付）」（鈴木家文書19-1-5）		『資料編 近世1』p.115に掲載
	⑤ 寛文7年「手形之事（寺領のうち河欠無田を検地にて芝間に囲い付け永代年貢定免に付）」（鈴木家文書19-1-6）		『資料編 近世1』p.111～112に掲載
	⑥ 寛文7年「手形之事（河欠無田を開墾の寺領に囲込み売買・年貢の件等約定に付）」（鈴木家文書19-1-9）		『資料編 近世1』p.111に掲載
	⑦ 安政4年「御用留」（鈴木家文書8-36・8-28）	柴崎村が一時名主を兼務した築地村（現昭島市）の御用留	史料の表紙（8-36）と本文（8-28）が分裂していた
	⑧ 安永3～6年「困人馬に付助郷お掛り候訴状（他5件訴状留）」（鈴木家文書8-24）	日野宿助郷組合と日野宿問屋の助郷争論の記録	
平成31年度	⑨ 「安永之度日光御社参之書記写」（鈴木家文書9-3）	安永5年の日光社参に動員された際の体験と見聞の記録	
	⑩ 安政2年「地震災献金一件留記」（鈴木家文書9-2）	安政江戸地震の後に行われた献金に関する記録	
令和2年度			
令和3年度	⑪ 嘉永7年「普濟寺借金仕法附帳」（鈴木家文書22-2）	鈴木平九郎による普濟寺の借金返済計画に関する記録	解説中
令和4年度			

*1 史料の表題は『新編立川市史調査報告書 近世編1 鈴木家文書目録』（立川市、2018年）をもとに一部修正した

平成30年度には8点、平成31年度には2点の史料を解説しました。その後の新型コロナウイルス感染症の影響を受け、令和2年度からは開催を見送る月もありましたが、解説を継続しています。

また令和2年度末に刊行した『新編立川市史 資料編 近世1』には、会の成果をもとに④～⑥の解説文を掲載し、協働の成果をひとつの形にできました。しかし紙幅の都合などもあり、成果の全てを掲載することはできませんでした。そこで次は史料の紹介も兼ねて、⑩「地震災献金一件留記」を例に解説の具体的な様子をお伝えします。



「地震災献金一件留記」(鈴木家文書9-2、立川市歴史民俗資料館所蔵)

史料を読む

～「地震災献金一件留記」を例に～

安政2年(1855)10月2日夜に発生した安政江戸地震では、江戸市中で1万人前後が亡くなり、町人地だけでなく武家屋敷も大きな被害を受けました。一方、柴崎村名主鈴木平九郎が書いた「公私日記」^{*2}の記録によって、柴崎村や多摩地域の被害は軽微であったことが知られています。

この地震後の献金について平九郎がまとめた記録が「地震災献金一件留記」です。「公私日記」にはこの献金についても記載があり^{*3}、実態はお上の強制で、砂川村の名主源五右衛門が不満を述べたことなどが書かれています。このように献金の事実は元々知られていましたが、本史料を読むことで、その経過や実態をより詳しく知ることができました。

本史料はまず献金の発端について書かれており、代官江川太郎左衛門による芝新銭座町(現港区)の鉄砲調練場建設に対する献金であることがわかります。江川家は代官として柴崎村や砂川村など多摩地域の村々を治めていましたが、加えて幕末には江戸の海防を担当し、小銃や大砲の製造、品川台場や葦山反射炉(静岡県伊豆の国市)の築造などに関わっていました。

👉 こうやって読みました

史料を読むにあたり、参加者各自で参考文献などを調べることもあります。例えば地名辞典や古地図などを見ると、「芝新銭座」が現在の浜松町付近の町名で、そこに江川家の武家屋敷や調練場があったことが確かめられます。「公私日記」によれば、調練場の建築には柴崎村の大工も派遣されており、平九郎も現場を視察しています。今では馴染みが薄い地名ですが、現在の地名と照らし合わせることで、立川からはるばる出向いた人々の姿もイメージしやすくなります。

多摩地域には江川家へ自発的に材木などを献納する百姓がいましたが、役人は他の村にも献金を要請しました。献金すれば長く幕府領でいられると最初は説明を受けたものの、後になって撤回されたとも書かれています。このような要請に人々は何を思ったのでしょうか。史料には平九郎自身の考えや他の村の反応も書かれています。

【原文】 (前略) 強而御進メ被成候義二無之、難義之者者無遠慮可相断旨被 仰下候得共、孰れ茂末々御支配を受候義故、恐怖之心も不少、首鼠両端之内、砂川村源五右衛門者衆二外れ煩悶いたし、福生其外江荷担を誘ひ候得共、同意之者茂無之、頻二心痛之容躰二候得共、平九郎之愚案者、只今忝忝御免願濟二相成候共、衆村一致二是を難シ候ハ、逆茂可遁謂茂無之、縦令御請いたし置候共、外村一同御免二相成候砌者、其村計献納可被 仰付事に茂無之、依而者速二受印相濟シ調金方難義不相成やう工夫専一与心得 (後略)

【意訳】 強制ではなく、無理なら遠慮なく断るよう言われているけれども、どの村も領主には恐怖心があるので、決心がつかないでいる。砂川村源五右衛門だけがひとり思い悩み、福生村などを誘っても味方は現れず、ひどく心苦しんでいる様子だ。平九郎の考えとしては、一、二か村なら免除されるかもしれないけれども、一斉に反対して逃れられるとは思えない。それに献金を了承しても、もし全部の村が免除されることにな

るなら、一村だけ献金させられるなんてことはないだろう。ならばさっさと受け容れて、金の工面に困らないよう注力すべきだと思う。

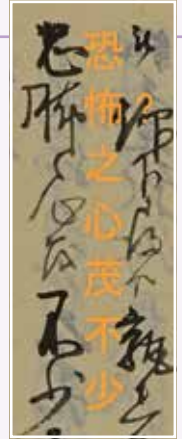
平九郎も献金の強制を理不尽に感じつつ、望みの薄い反対運動に期待をかけるより、高確率で待ち受けている資金調達の課題にこそ取り組むべきという、現実的な考え方をしていたようです。

👍 こうやって読みました

上の引用箇所は、参加者一同で特に解説に悩んだところです。例えば「首鼠^{しゅそりょうたん}両端」を国語辞典で調べると、決心^{しんぎん}がつかない様子^{しやうし}の意味だとわかりますが、「衆村一致」ということばは見当たりません。ただし「衆^{しゆう}口一致」という人びとの意見の一致を意味する熟語はあるので、村同士の意見を合わせることだと類推できます。「難ずる」は非難する、ここでは献金に反対するということでしょう。

また「恐怖」と読みたい文字がありますが(右画像)、よく見ると「怖」ではなく「月」の横に「布」を書いたような形になっていて、くずし字辞典では同じ形の文字は見当たりません。そこで「公私日記」など平九郎が書いた他の文章を見てみると、同じような字で「恐怖」と書いている箇所がいくつも見つかりました。そのためこの字も「恐怖」と読めると判断できます。

辞書の情報は解説の助けになりますが、そこからさらに推理が必要なきもあります。



献金のもう一つの問題は、村の中で誰がどう負担するのかわかるので、本史料の後半はその記録となっています。砂川村では献金額の半額を裕福な百姓が受け持ち、残りを村民全員に割り振ったこと、日野宿(現日野市)・八王子宿(現八王子市)・伊奈村(現あきる野市)などでは全額を裕福な百姓が負担したことも書かれており、分担の仕方は村によって様々でした。柴崎村はというと、平九郎が献金について村の会合で伝えたところ、2年前の献金も富裕層が負担し、鎮守諏訪神社の再建費用も富裕層が負担する予定だったことから、彼らの希望で今回は村民全員に分担させることが決まりました。度重なる負担によって、富裕層だけでは賄いきれなくなっていたことがわかります。

👍 こうやって読みました

振り返れば、発足したばかりの会が最初に取り上げた史料が諏訪神社の再建記録でしたが、それを読んだときも誰がどう再建費用を負担するのかという点が話題に上っていました。人々の負担という点で、代官への献金と神社の再建という同時期のできごとが関係していたことがわかりました。色々な史料を読み重ねていくことで、人々や地域を取り巻く歴史の流れが少しずつ見えてきました。

📖 おわりに

史料に書かれた文字や内容を読み取ることは容易でない場合もありますが、市史編さん室のスタッフも含めた参加者同士で意見を交わしながら解説しています。辞書や歴史の本で得た知識、立川や多摩地域特有の事情、あるいは「公私日記」など他の史料からわかることなど、様々な情報が史料を読む手がかりになります。多くの人の目を見て、話し合うことは、史料を正しく読む上で大切なことです。

「立川の史料を読む会」が発足して7年が経ちましたが、うち3年間は新型コロナウイルス感染症の流行により完全に活動できていないというのが正直なところです。しかしながら貴重な市民協働の場として活動を絶やすことなく、今後も市民の方々とともに立川に残された史料を読んでいきたいと思えます。

- ※1 鈴木家文書や鈴木平九郎について、詳しくは『新編立川市史調査報告書 近世編1 鈴木家文書目録』(立川市、2018年)の解題や『新編立川市史 資料編 近世1』(立川市、2021年)の鈴木家文書解説を、柴崎村や近世史料全般の説明については『資料編 近世1』「この本を読まれる方へ」を、あわせてお読み下さい。
- ※2 公私日記研究会編『(改訂版) 鈴木平九郎 公私日記』第1～5巻(立川市教育委員会、2011～2015年)として刊行されています。
- ※3 北原糸子「安政江戸地震情報の伝播過程」(同『近世災害情報論』塙書房、2003年)、倉員保海「公私日記の展望」(『(改訂版) 鈴木平九郎 公私日記』第5巻、2015年)などの論考でも取り上げられています。特に後者は一連の献金や調練場建築の負担について経過をまとめています。



令和4年10月～令和5年3月活動報告

月	日	活動内容
10月	2日	民俗・地誌部会：中里神明社・宮沢諏訪神社・殿ヶ谷阿豆佐味天神社 例大祭調査
	5日	近世部会・近代部会：砂川旧家にて資料調査(以降も継続的に実施)
	10日	民俗・地誌部会：砂川地区蚕室関係調査
	15・27日	民俗・地誌部会：松明づくり、松明回し関連調査(よいと祭り、松中小学校)
	29日	近代部会：国立国会図書館にて資料調査
11月	2日	民俗・地誌部会：団地・自治会関連聞き書き
	17日	近代部会：東京都公文書館にて資料調査
	18日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	19日	民俗・地誌部会：砂川地区伝承民謡保存会座談会
12月	11日	令和4年度市史編さん関連講演会
	12日	近代部会：市立第八小学校資料調査
	12日	第2回・民俗・地誌部会会議
	16日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	22日	現代部会・特定部会会議
	23日	民俗・地誌部会：こもれびの里行事関連撮影
	23日	先史部会：資料編編集会議
	25日	第3回・近代部会会議
	25日	民俗・地誌部会：上砂町個人宅聞き書き
	27日	古代・中世部会：日野市郷土資料館板碑調査
27日	第3回・現代部会会議	

月	日	活動内容
1月	1日	民俗・地誌部会：殿ヶ谷十二支囃子連、獅子舞記録調査
	14日	民俗・地誌部会：麦踏み、棒打ち関連聞き書き
	23日	近代部会：市立第五小学校資料調査
	23日	民俗・地誌部会：砂川町出身者聞き書き
	26日	民俗・地誌部会：砂川町個人宅資料調査
	30日	民俗・地誌部会：殿ヶ谷一座資料調査
2月	3日	民俗・地誌部会：曙町個人宅資料調査
	6日	民俗・地誌部会：上砂町個人宅聞き書き
	9日	民俗・地誌部会：砂川の太鼓会 一纏聞き書き
	12日	民俗・地誌部会：砂川町個人宅聞き書き
	17日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	19日	民俗・地誌部会：西砂町個人宅聞き書き
3月	23日	民俗・地誌部会：桑室(若葉町)実測調査
	7日	第4回・現代部会会議
	10日	資料編刊行(先史部会)
	10日	報告書刊行(古代・中世部会)
	13日	第3回・民俗・地誌部会会議
	16日	現代部会・特定部会会議
	17日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	23日	第18回編集委員会議
	28日	第15回編さん委員会会議



受贈図書・資料提供者一覧(令和4年度)

以下にご芳名を掲載し謝意を表します。(敬称略・五十音順)

※資料借用をさせていただいた方のご芳名は除きます。

【個人】五十嵐真一、大山一、柿澤良周、粕谷正夫、鈴木茂

【機関】清瀬市企画部市史編さん室、熊谷市教育委員会社会教育課市史編さん室、公益財団法人たましん地域文化財団、狛江市企画財政部市史編さん室、東京都公文書館、十津川村歴史民俗資料館、千葉市立郷土博物館、延岡市教育委員会文化財・市史編さん課、八王子市郷土資料館、府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当、有限会社えくてびあん、横浜市史資料室、常陸大宮市教育委員会

市史編さん室では、引き続きむかしの写真や古文書などを探しています。心当たりのある方は市史編さん室までお知らせください。

市史編さん広報紙 **たちかわ物語** vol.15

令和5年(2023)3月20日発行

発行 立川市
〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

編集 産業文化スポーツ部市史編さん室市史編さん係
〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201


TEL (042) 506-0021 / FAX (042) 525-1601

E-mail chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp

URL https://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html

印刷 有限会社立川システム印刷

[市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています]



市史編さんHPはこちら
からアクセスできます。

刊行物紹介

令和5年4月1日から販売予定の新編立川市史資料編と調査報告書について、見どころや解説をご紹介します。

新編立川市史 資料編 先史

新刊の『新編立川市史 資料編 先史』は、立川市域の遺跡から出土した先史時代の考古資料をまとめたもので、文字資料がまったくない旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代が対象です。立川市には21か所の遺跡があり、向郷遺跡や大和田遺跡などで先史時代の遺物が多量に発掘されています。その中から各時代の人々の生活・文化をよく表す重要な資料を選び、時代順・時期別に整理して解説するものです。また、縄文土器に残るマメ類の種子圧痕の自然科学分析の成果や、地中レーダー探査による古墳の調査成果なども収録しています。都市開発の中で進められてきた遺跡の保護と埋蔵文化財調査の歩みを資料でたどった最終章は、他の自治体史にはない特色です。



向郷遺跡第25地点から出土した土器群 (小川忠博撮影)

考古資料の記述には耳慣れない専門用語が多く、一般の方々には難解に感じられるかもしれません。そのため本書では実測図や写真を多用し、主要な考古資料を画像で一覧できるカタログのような本にまとめました。ものが語る立川の先史時代をぜひ紐解いてみてください。(谷口康浩)

B5判・カラー口絵8ページ・本文約600ページ・上製本・価格3,500円(予定)

新編立川市史 調査報告書 古代・中世編1

古代中世の考古・石造物・美術工芸

立川市には古代・中世の遺跡、石造物、仏像等の美術工芸品が遺されています。このたび古代・中世部会では、これらの詳細な調査を行い、その成果を報告書としてまとめました。

本報告書では、現在では失われてしまったものや損傷してしまったものについても、立川の古代・中世を知るための重要な資料として調査を行いました。普濟寺の板碑群、普濟寺本尊釈迦如来坐像や開山の物外和尚像は残念ながら焼損・焼失してしまいましたが、過去の調査を再検証し詳細なデータを示しました。また現存するものとして特筆すべきは、立川市を代表する石造物・国宝の普濟寺六面石幢です。今回、画像処理の技術も用いて分析を行い、類例調査の結果からも、普濟寺六面石幢が規模や彫刻、石材加工においても特殊で優れたものであったことがわかりました。また柴崎町の旧満願寺に安置されていた仏像がいくつか伝存しています。このような貴重な文化財が身近にあることを知っていただき、本報告書をご活用いただければ幸いです。(鎌倉佐保)

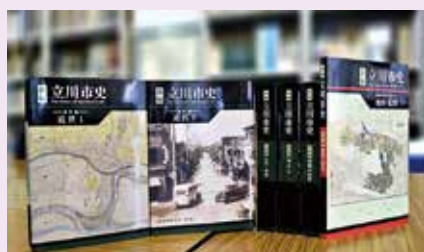


普濟寺六面石幢実測図とオルソ画像

A4判・フルカラー・約260ページ・並製本・価格2,000円(予定)

既刊好評発売中！ 新編立川市史刊行物は各種好評発売中です。

頒布場所：立川市役所本庁3階市政情報コーナー、立川市歴史民俗資料館、オリオン書房ノルテ店、ジュンク堂書店立川高島屋店



新編立川市史 資料編

古代・中世	B5判・カラー口絵16ページ・本文604ページ・上製本・価格2,500円
近代1	B5判・カラー口絵16ページ・本文604ページ・上製本・価格2,500円
近代2	B5判・カラー口絵8ページ・本文580ページ・上製本・価格2,500円
現代1	B5判・カラー口絵4ページ・本文579ページ・上製本・価格2,500円
柴崎の民俗 残部僅少	B5判・カラー口絵8ページ・本文535ページ・上製本・価格2,500円
地図・絵図	A4判・フルカラー・190ページ・上製本・DVD付・価格3,000円